

ビジョン連携推進会議第四分科会 第3回 開催概要

日 時	平成 27 年 1 月 29 日(木)
テーマ	都市農業・農地の役割（多摩地域における農業の現状と今後の展望）
臨時構成員	首都大学東京都市環境科学研究科教授 菊地 俊夫 氏

議事要旨

○ 立川市における都市農業の変遷

- ・ 多摩地域の農業としては、都市化が進んでくるなかで、①農地、里山、自然地、緑地の減少、②都市的な産業との経済的な格差、③農家・農村のアイデンティティの保持、④農業の従事者の高齢化といった問題が生じている。こういう問題にどのように対応していくのか、ということが、一つの課題になっている。
- ・ 農家数の推移では、1990 年代以降に入ってから減少が下げ止まっているが、年齢構成では高齢者の割合が高くなってきており、農家の高齢化が顕在化している。これに伴い、小規模経営多品目栽培多毛作、直売所経営という多摩地域の農業の特徴が形成されてきている。
- ・ 直売所経営は、①伝統型→②多品目農産物型→③農商工連携型→④体験・コラボレーション型と変化するなかで、高齢者のみならず家族総出で行う産業として成立するように変化している。
- ・ 直売所は、都市住民にとって、安全で安心して安い新鮮な農産物を供給されることに加え、旬の時期の野菜が食べられるというメリットを生み出している。
- ・ さらに、経営形態が変化する中で、直売所は、学校給食への食材の提供、援農ボランティアの受入れ、農業研修生の受入れ(就農する若者の支援)、無農薬・無化学肥料野菜を使用したパンの販売、野菜をベースにしたカフェやレストランの経営、都市住民の余暇空間の提供といったように、多種多様な役割を担うようになってきた。
- ・ 都市近郊農業の、あるいは都市農業の強みということには、複数の直売所が連携して開催されるマルシェなどを通じて都市住民との交流・連携が生まれる、異業種(地元のレストラン、飲み屋、お菓子屋)との連携を通じて立川産野菜のブランド化が図られることが挙げられる。

○ 練馬区における農業体験農園

- ・ 農業体験農園とは、都市住民が自分の知識や経験に基づいて農業をする区民農園や市民農園と異なり、都市住民に農家の人が指導する農園をいう。
- ・ 農業体験農園では、農家が利用者(都市住民)に対して栽培方法、作付する作物の種類、使用する種、肥料、世話の頻度といったことを懇切丁寧に指導する。このため、利用者が自ら予想する以上に高品質、多量の野菜を収穫することができ、収穫物を隣人等に配ることを通じて住民同士の交流が生み出されている。さらに、農地も良好な状態を維持できる。
- ・ 農家のメリットは、①大体 1 区画 43,000 円/年の安定した収入(10 アールで大体 100 万円以上)が得られる、②労働時間が縮減(40 アールの農地で 25%程度の縮減)される、③生産緑地なので相続税が猶予される、④都市住民との交流が図られる、ことが挙げられる。
- ・ 利用者のメリットは、①質の高い農業の技術が身に付く、農作業への知識が増加して、栽培技術も向上する、②土に触れる喜びが出てくる、③地元の農家との交流が生まれる、④利用者同士

の交流も深められる、ことが挙げられる。

- ・ 都市住民は朝早く家を出て夜遅く帰ってくる生活が一般的で、周りの人たちとほとんど交流がない。そのため、こうした農園によって、地域の人と触れ合うことができるようになる。
- ・ そのほか、農業体験農園のメリットとしては、地元の新鮮ないい野菜を使う地産地消型のレストランといった新しい産業が台頭してくることも挙げられる。

○ 小平市における直売所

- ・ 小平市では、直売所が、単にもの売るだけの施設でなく、都市住民と農家の人の情報交換や交流の場にもなっていて、農、農地、農業、あるいはコミュニティというものをうまく残していくという、都市と農村がうまく共存するようなシステムとして機能する可能性を秘めている。

○ 多摩地域の農業の今後の一つの方向性(有機野菜の栽培)

- ・ 農林水産省「県別有機認定事業者数(平成26年3月31日現在)」によると、東京都の有機栽培農家戸数は全国で最も少ない6戸である。関東地方では、千葉県が比較的多く158戸となっている。また、日本は国土が非常に細長いので、全国から有機農産物を集めることにより、年間を通して、同一の種類の農作物を市場に供給することができる。
- ・ 都民の有機農産物に対する関心は高いので、多摩地域の農業においても、こうした付加価値をつけることによって、十分な収入が得られる可能性はあると考えられる。

○ 多摩地域における農業の展開

- ・ 成功事例の多くは、農家自身の努力、農家のリーダーによって成し遂げられている。立川市では、地域の消防団が農家の若い後継者のよい交流の場となっているとの話もあり、興味深い。
- ・ 農業体験農園を開設している農家は、専業で、しっかりとした農業技術と農業に対するポリシーや哲学を持っているところが多いと思われる。実際に話を伺うと、コミュニケーション能力への不安や親の世代と子の世代の考え方の相違により開設にちゅうちょすることがあっても、一歩踏み出してしまえば、特に支障もなく進んでいるという印象を受ける。結局のところ、自分たちの農業や農業に対する考え方がしっかりしているかどうか重要になってくると思う。
- ・ 小・中学校等と連携して、農業体験農園を環境学習の場として活用していくと、環境や生物、農地というものに対する市民の理解も進むのではないかと思う。
- ・ 農家、市民、学生などが、生き生きと活動をしていくためには、農家同士のネットワークや市民の需要によって活動がボトムアップ的に広がっていくことが望ましい。
- ・ 行政は、関係者が、緑を守る、里山を維持する、農地を美しく維持するという活動が嫌々ではなく楽しく行われるように、主導的な役割を果たすのではなく、制度設計や活動の下支え、根回しといった役割を果たすことが望ましい。
- ・ 多摩地域の先進的な農家の多くは、血縁や地縁的な結びつきとは違って、機能的な結びつきによって結びついてきており、農業の産業化、経済化が進んでいる。
- ・ 多摩地域の農業は、市場が近い、消費者がたくさんいるので工夫次第で、色々な形に発展することが出来る可能性を秘めている。
- ・ 多摩地域の農家のいろんな取組が、緑の問題、教育への効果、地域の人たちのネットワーク形成、食料の供給と、様々な分野に波及していることが理解できた。
- ・ これから多摩地域も人口減少局面を迎えるが、これからの開発や地方と東京の関係(地方創生)を考える上で、農業というのは非常に重要な切り口の一つである。